

サトリの  
ココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、  
仏教に興味を持つ人が増えています。  
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法——

多磨全生園日蓮宗駐在布教師  
日蓮宗善行院住職  
大庭一記さん

第66回

私は約25年間、多磨全生園の駐在布教師を務めています。  
多磨全生園は、全国に13施設ある国立ハンセン病療養所のひとつ。ハンセン病は、らい菌により皮膚や末梢神経、眼などが侵される感染症で、現在では3か月の薬投与で完治し、今の日本ではほぼ感染・発症することのない病気です。筋肉の萎縮や四肢の変形などの後遺症による障害が残る場合があります。患者は偏見や差別を受けてきた歴史があります。全生園にはそのように長く苦難を強いられてきた元患者さんが療養されているのです。

全生園内の日蓮宗信徒さんたちの会が「唱行会」です。現在の会員は30数名。平均年齢は90歳前後と高齢です。行事などの際に、単に法要や法話だけで終わるのではなく、私も何か皆さんに喜んでいただけることはないかと考え、約6年前からサククスを始めました。仏事などの折、信徒さんと親睦を深めるために演奏しています。唱行会の信徒さんはみな熱心。その信心には私も頭が下がります。

病気を経験して命のありがたさ  
信心の大切さを実感

実は去年の8月、私は脳出血を起し入院することになりました。右手と右脚にマヒがあり、口も少し動かしにくい。最低2週間の入院を告げられましたが、頭はしっかりしていたので、すぐにリハビリを決意。右手が使えないので、まずは左手で箸を持つことから。左箸が使えるようになったら今度は右手で。筆ペンの練習やストレッチ、歩行訓練なども行い、日に日に機能が回復。1週間で退院許可が出ました。2週間目には仕事にも復帰。3週間目からは近くのプールへ通い、歩行からクロール、平泳ぎまでできるように。今では私が半年前に脳出血を起したとは誰もわからないかもしれません。

私は今まで病気などしたことがなく、入院したりする人をうらやましいときえ思っていました。ところが自分が病気になってみると、

こんなに大変なことはありません。病気を経験して初めて、健康であることのありがたさ、命の大切さを感じ、そして信心を持って、気を強くすることが大事だと身をもって実感しました。

心の触れ合いを重ねて  
見えない壁を取り払う

私は全生園の駐在布教師になるまでは、ハンセン病をよく理解していませんでした。偏見はありませんでしたが、目に見えない壁はあったかもしれません。でも、信徒の方と話したり、一緒に食事をしたりして触れ合いを重ねるうちに自然と壁がなくなってきました。

サトリのココロとは、相手との差（違い）を分ける差別ではなく、差（違い）をとる＝サトリの心で触れ合うこと。そして永遠の命（久遠の魂）を信じ抜くことです。駐在布教師という経験を通して、私はそれを強く感じています。

永遠の命を信じ抜くことが  
サトリのココロにつながります

おおばいちき 1951年生まれ、東京都出身。練馬区にある善行院の長男として生まれる。立正大学仏教学部を卒業後、静岡の北山本門寺で1年間修行。その後、立正大学大学院へ進学。1985年、善行院の住職に。1991年より多磨全生園日蓮宗駐在布教師も務める。日蓮宗大荒行堂を3回成満。柔道3段。書道は日蓮宗僧職で書家の星弘道氏に師事し、師範の資格を持つ。慈雲院日草上人が創立した慈雲堂病院の仏事・法要も担当している。



2月25日、多磨全生園内の日蓮宗会堂で営まれた「日蓮大聖人第795回御降誕会」の法要。